

一般演題

1. LPO 心プールゲート・フーリエ解析の検討

若松 裕幸 新 健治 木住野 皓

(金谷病院)

^{99m}Tc 心プールゲート法のフーリエ解析は左室局所壁運動異常を知る有力な方法である。しかし左前斜位像(LAO)では前壁中隔について充分検出できるが、後下壁はよくわからない。われわれは左後斜位像(LPO)によってこれを検出できると考え検討した。

方法 日立 GAMMA-VIEWH に高感度平行穴コリメータと S/N 比向上を目的とした自作の鉛マスクを合わせ使用した。電算機は ADAC system II (400 KB; LSI 11/2, 20MB ディスク) に $64 \times 64 \times 8$ bit/フレームで 1 心拍 32 分割したマルチゲート法で入力。対象は今年 3 月より 9 月までで X 線シネと RI 検査を 1 週間以内に施行したもので比較した。

結果 LPO フーリエ解析(基本周波)像は右冠動脈狭さく 90% 以上の全例(6 例)にて後下壁の位相遅れがありシネの結果と一致した。また本法を施行するにあたり S/N 比の良く統計精度の高いデータ採取することが肝要であった。一方向あたりの検査時間は ^{99m}Tc 30 mCi で 5~10 分間であり日常検査になる。

2. 呼吸同期心筋断層シンチグラフィの検討

——心拍同期法との比較——

駒谷 昭夫 高橋 和栄 高梨 俊保

(山形大・放)

Rotating bilateral collimator 法による TI-201 心筋断層シンチグラフィを ECG マルチゲートによる心拍同期にて行うことにより、心拍に伴う心筋厚の変化や壁運動の情報も同時に得られるようになった。しかし、この方法は拍動による像のボケはなくなるが、代わりに呼吸動によると考えられる疑似欠損が目立つことがわかった。この疑似欠損の原因を確かめるために、呼吸同期による心筋断層シンチグラフィを行い、心拍同期法と比較検討した。心尖部から下壁にかけてよく見られる欠損は、呼吸動と、それに伴う横隔膜による心筋下壁部の同期的なマスキングによる疑似欠損と考えられた。心拍同期法と呼吸同期法の併用、あるいは呼吸動に起因する artifact

の性状把握は、確診率向上に大いに役立つと考える。

3. ^{67}Ga の肺びまん性集積に関する検討

宮川 隆美 秋村留美子 川上弦一郎
神谷 受利 甲藤 敬一 畠山 隆
西沢 一治 篠崎 達世 (弘前大・放)

昭和54年12月より昭和58年10月までに経験した24例の ^{67}Ga 肺びまん性集積例につき、胸部単純写真と比較検討した。13例は胸部単純写真上異常は見られず、症状もほとんどなかった。そのうち2例は lymphography 直後のもので、肺の oil embolism への集積と考えられた。 ^{67}Ga の間質性肺炎や、薬剤性肺炎への早期集積例の報告は散見されるが、われわれの症例の多くは、症状も単純写真も所見のないまま経過し、 ^{67}Ga の集積は数か月後改善していた。13例中12例までが悪性腫瘍患者であり、 ^{67}Ga scan 時はその直前まで化学療法や放射線療法が行われていた。われわれの経験から、 ^{67}Ga 肺びまん性集積は単に炎症やアレルギー反応に対する早期集積のみならず、別の factor の存在が示唆された。悪性腫瘍などによる全身状態の低下、および放射線療法や化学療法に対する反応が、 ^{67}Ga の肺びまん性集積に何らかの影響があるのかも知れない。

4. Bochdalek hernia 術後の肺シンチグラフィ

榎本 京子 村上 優子 宮内 孝治
松平 直哉 平田 研二 玉川 芳春
(秋田大・放)
加藤 哲夫 榎本 信哉 (同・小児外)

昭和53年8月より58年10月までに、秋田大学医学部附属病院では Bochdalek 孔ヘルニア 15 例を経験し、生存例13例中12例について肺血流シンチグラフィを術後3年間にのべ27回施行した。Bochdalek 孔ヘルニアは、生後早期に発症したものほど予後は悪く、生後24時間を境に死亡率は約 1/3 に減少すると言われている。

今回、肺血流シンチグラム上で、患側肺の健側肺に対する $^{99m}\text{TcO}_4^-$ のとりこみを 0~4 の 5 段階に score 分